



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	(特別寄稿) 感染症と共に生きる授業をする : 「総合学習をしよう」
Author(s)	佐藤, 広也
Citation	北海道大学教職課程年報, 11, 26-42
Issue Date	2021-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80971
Type	departmental bulletin paper
File Information	030_2185-9809_11.pdf



感染症と共に生きる授業をする

——「総合学習をしよう」——

佐藤 広也

【年報編集委員会からのまえがき】

本学教職課程の「総合的な学習の時間の指導法」で非常勤講師を担当していただいている佐藤広也先生（プロフィールは文末参照）から、本年度の小学校の教育現場でどのような事態が生じ、進んでいったのかに関する実践報告が寄稿されました。

今年度は未だかつてないことが学校（大学でも）で生じ、教員はそれへの対処を迫られました。この「感染症と共に生きる授業をする——「総合学習をしよう」——」以外の2稿も、「コロナ禍」の教育実践に関わるものですので、年報編集委員会としては、掲載することにしました。以下、目次となっております。

【目次】

はじめに 経験したことのない事態にあって

1. 子どもの願いは生きること 生きことを励ます、支えるために
2. 保健室の行列 熱 マスク ソーシャルディスタンス
3. 子どもたちに経験を記録化させていくこと
4. 「はたらく細胞」を見ながら考える自分の体のこと
5. 新型コロナ肺炎 COVID-19 をキャラクターにしてみる
6. 今も昔も「マスク」で感染症を防ぐ そして、「密」を防ぐ
7. 「スペイン風邪」の授業化へ向けて
8. 「感染症カルタ」を「読む」
9. 「感染症カルタ」を創る
10. 47 番目のカルタ作り あるいは 47 番目だけのカルタづくりを

終わりに 楽しく楽しく生き生きと学ぶための体をくぐった体の授業を

はじめに 経験したことのない事態にあって
それは、突然やってきた

アンケート結果						
休校中、楽しかったこと						
	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
1	運動	ゲーム	ゲーム	ゲーム	ゲーム	ゲーム
2	ゲーム	室内	遊び	本	TV	その他
3	おもちゃ	遊び	バーベキュー	TV	遊び	その他
休校中、がんばったこと						
	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
1	勉強	勉強	宿題	勉強	勉強	勉強
2	運動	手伝い	手伝い	手伝い	家事	手伝い
3	手伝い	室内	運動	ゲーム	運動	なわとび
休校中、一番長くしていたこと						
	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
1	勉強	勉強	ゲーム	ゲーム	ゲーム	ゲーム
2	ゲーム	TV	宿題	TV	勉強	勉強
3	TV	手伝い	その他	手伝い	集会	その他

新学期、2020年の4月からの休校中に子どもたちはどうであったのかのアンケート結果が貼ってあった。興味深いので写真に撮った。ゲーム三昧である。

「札幌へ行くな。札幌から来るな。」「周りの目があるので札幌へはちょっと。」という発言をいくつか聞いた。冗談かと思ったのだがそうではなかった。

集会や会議が軒並みキャンセルとなった。その一方で、全道的に休校が続き、深刻な状況であるには違いないが、

「ぜーんぜん、うちの町は普通に焼き肉屋も混んでたし、まあ、新型コロナはよそ事っていうか、札幌の話って感じで。」の声もあった。

「新型コロナ肺炎」については、2020年、雪まつの後、瞬く間に北海道の患者の数を多く報道しはじめた。これは、記憶と記録とをしていくべき出来事である。それは、この病気は何が原因で、どのよ

うに感染し、どう対応するのかということはよくわからず、段々と報道で一躍、「大問題」になっていき、気がつくと学校は機能停止から教育活動が縮小していた。それから、またその始まりの冬を迎えようとしている。北海道、札幌での日々の感染者の数は、恐ろしいことにこれまでの最大となっている。しかし、なぜか世間は、「GO TO～」というキャンペーンが、マスメディアやインターネットで流されている。何を信じてどうしていくのか、「今は21世紀だぞ」、と叫んだところでどうしようもない。私は小学校の教育現場に長いこといるし、その半分の年月は大学生を相手の授業も担当してきた。子どもと保護者、教職員はこの事態にどのような学校を生み出そうとしているのかを少しでも報告する。2020年初め、患者が見る間に増え、ぐんぐんその数を北海道が稼ぐという報道が不気味な不安を煽った。やがてそれは



全国へ、東京などの大都市での感染爆発が深刻化していった。新型コロナウイルスは老人と持病のある人が重篤化するという。それに当てはまるのは自分ではないか、と密かに思うのだった。職員室では突然の知事の全道一斉休校を告げる一報を聞き、保護者からの「札幌はどうなるんだろう。」の問い合わせに固まる。前触れもなく札幌も一日遅れて「休校」だという。札幌市内の小中学校一斉休校であることが告げられた瞬間。「評価の時期だぞ。」「まだ教科書が終わってないぞ。」という声が飛び交い、明日までに時間割を作り直そう、宿題を出さないと・・・と騒然。このご時世なので、保護者への携帯への「メール配信」も行う。一つの学校だけ開けていることはできず。私たちは「なぜだ？」がどんどん出されても何もできない。ここまでの状況を私たちは実は職員室でのテレビで知ったのだった。これが現実である。

教職員もまた子育て中の保護者である場合が多い。自分自身の家族や家庭のことに話が及ぶ。保育所は、学童保育所はあいているのか、ミニ児はどうするのか・・・全てが止まった時に、「子どもを守るのは親。」というのはとても簡単だ。しかし、学校に通う教え子たちの明日は、我が子の明日への不安と重なってしまう教員が続出だった。子どもを何からどう守るのか。子どもは社会の宝なのに、なぜ、いきなり不安を煽って、小中学校から追放するのかというのが共通の怒りだった。新型肺炎は恐ろしい。でも、そのために行政は何をするのかが不明。一斉休校を伝えるテレビでの知事の姿は、「高級マスク」だったが、テレビを見ている教師たちも「マスクが手に入らないのよ。」だった。この隙間に、特別支援の子どもたちや虐待にあっている子どもたちのことも頭をよぎるが、手を出せない。方針がない。

全てが壊れる。明日が見えない

恐ろろ！といって煽る報道に囲まれて、あげくにはまた学校の休みが延長された。それでも、卒業式はやることに。式は30分以内で終わることになった。「君が代」は、声を出さないことになった。子どもたちの合唱は、歌う時にだけ間を離すことで歌うことに一度はなるが、最後は、在校生も来賓の出席はもとより合唱すらもなくなった。

4月の入学式、始業式が行われた。これでようやく再開か、と思われたが、新一年生にとってはわずか2日の給食で、休校を迎えた。担任たちも、誰が誰やら顔も名前もわからないままだった。全ての学校行事は中止か延期、縮小を迫られた。運動会も遠足も1年生を迎える会も。全てが秋へと回された。短い夏休みがあり、分散登校が再開された。

学校によっては七時間授業を分散して行うという状況もあった。参観日もない。懇談もない。個人懇談だけはやる。PTAの行事は、総会を含めて全てストップだった。学校には予算がいくばくかついてこの「コロナ対策」に向けて、様々なものが買われた。扇風機、消毒薬、体温計。そして、職員室は、対面する机の前に、コンビニのようなビニールのシールドが掛けられた。校内は、原則一方通行の矢印が廊下に貼られた。音楽での歌や鍵盤ハーモニカや笛も吹けない。PTAの予算でフェイスシールドが全員に配布されて「音」が帰ってきた。だが給食時間は、学級の人数の多い所は未だに、分散して食べている。不気味である。

怪しい試みがたくさんあった

2月からの休校で私たちはいろいろな試みを見た。zoomにYouTubeで配信である。果たしてこれらは、成立しうるのか。そもそもネットに接続できる環境に子どもたちはいるのかということも問われるのに、

「今、zoom やネットでの授業を考えないのはありえない」などと新聞はまことしやかに煽ったのを覚えている方も多いだろう。学年が10分ずつ接続して行くのだが、当然に、小学1年生はできないので保護者に頼る。各学年が十数人ほどつながった。手を振る、答える、それでおしまい。各学校はそうした一斉に全学年をカバーできるような通信環境にはないし、操作する者もない。その後、各学校に何台かずつタブレットが届いたままである。可能性としてのツール活用であると信じてはみるもののこうした機器の活用の議論はないはまだ。これは『書かずの753』という2014年のマンガだ。不気味な内容が取り上げられていた。何かしら既視感とでもいうべき内容であったことを思いだしたがこれらが杞憂であってほしい。現場も家庭も地域も行政も子どものためにそれぞれが必死に努力していることを信じたい。



出典：相場英雄・中山昌亮『書かずの753』第1巻、株式会社小学館、2014年、60・61頁。

学校再開後の子どもたちへのアンケートが描く世界

札幌市教育委員会は学校再開後の子どもたちへアンケートをとること、それらを活用して欲しいということだった。ここには市教委が想定しうる子どもの「今」が描かれていた。学校再開後不安なことは何かの設問では、「友達となかよくやっていけるか」「勉強についていけるか不安」などの項目だった。これは、市教委なりに子どもがこの休校の状況で追い込まれた姿を想定しているわけで、学校の役割の高さを認めているとも言える。このアンケートの「傾向性」を、全学年担任に記入してもらったがその結果は驚くべきもので、「ほとんどかわりありません。」というものだった。それは安心できることではない。「ほとんど」に入らない子どもたちの不安は個人の中では絶対的に膨らんでいくのである。

登校後のマスクの着用が不安になって学校に来られない子もいた。逆に、自分が不登校であったから、この再登校までの間、みんなが不登校で安心したという子もいた。



教科書の重さ 教育課程の現実

全学年の授業に入る役目を担任外として負っている。小5の子どものランドセルを持ってみた。重い！実感として重いのだ。2020年度から、新しく採択された教科書をランドセルに詰めて学校に行ったであろう子どもたちには、4月第一週で休校となった。この間6月まで学習はないわけで、登校が再開してもしばらくは欠席しても欠席扱いしないで、学級活動程度の分散登校があった。

市教委のホームページ上に、単元の学習のしかたとポイントが載っているという案内を学校からメールで案内が流される。これに加えて、宿題プリントもだされるが、そもそも新学期からの習っていない部分の学習もプリントで出す。教えてもないこと、そして在校生には積み残した学習内容も重くのしかかったのだ。再登校が始まってしばらくは「学習したことにして、答え合わせ中心の学習」になった。このことが算数で言えば無残にもいくつかの単元の丁寧な教えができず、答え合わせ中心の算数になってしまった。全教科にわたって学習内容はずたずたとなった。このため、多くの学校では通知表を出す時期を大幅に遅らせたり、評価項目を減らしたりとなった。通知表のありかたそのものも議論にあがるようにもなった。どこの単元のどの項目を削るか、軽重をどうするのが、いくつかの団体からモデルケースとして出されるのを見て、教科のありかた教科書のありかたにも疑問が出される会話があった。新しい教科書が採択されて出発したいわば学習指導要領実施の一年目であつたのである。それを覆い隠すように、9月入学だとか全く何の検討も準備もない空虚な議論がされ始めて、職員室はしらけムードだった。

1. 子どもの願いは生きること 生きことを励ます、支えるために

子どもの願いは何だろう。これは生きることである。

そもそも学校がどのようなものであるのかは新1年生にはわからない。だんだんこの状況になれてしまうと、教員も子どもも、保護者ですら「本来の学校の姿」が何であるのかが見えなくなっていく。しかし、今見えている光景の中にも改めて惰性でやってきた学校の当たり前を考え直すというきっかけにはなるだろう。一つ言えるのは、マスクやソーシャルディスタンスが子どもの言葉になりつつあるが、これだけを守るだけで感染が防げる程度の病気であるということもわかりつつある。1年生は運動会の練習でいつもなら、間隔を開けて並ぶことを随分言う。しかし、1年生担任が、「何も言わなくても自

然と間隔をあけて並べているのよね。」と感心し、不思議がっていた。

必要以上に手を洗い、消毒しないと気が済まない子も現れ始めている。「手をつながない」「しゃべらない」ということは人間への信頼を損ねることだと思う。「新型コロナ肺炎」だけが病気ではない。「新型コロナ肺炎対応型生活」だけを「行動規範」だけで上から下ろすだけでよいのだろうか。学校生活で、感染症そのものを学ぶ時間はほとんどない。あっても学級活動で、養護教諭が資料を出す程度であろう。高学年での「保健」の授業でもなかなか時間も取れず、理解する授業もできないままなのが現実である。

休校中の子どもたちがさらされていた「情報」は、「中国でコウモリを食べてコロナが始まった。」「中国人は許せない!」というものである。それは、「トランプ大統領も言ってた!」と「情報」交換する子どもたちの姿になって表れていた。誰かに原因をなすりつけ、「自粛警察」「消毒太子」にしてしまう雰囲気を作ってしまうのだった。私たちは、子どもの現実に向かい合った時に何が必要なのだろうか。

実は大事な事は、「コロナクイズ大会」の授業をしようではない。実際には、出版社や暖房器具メーカーにも「コロナ」が存在しているし、ディズニーアニメのキャラクターにも「コロナ姫」がいるのに「コロナ、コロナ」と叫んで「それでは問題です」型の思いつきの授業プランでよいのか。その無神経さも腹が立つ。「何がコロナなのか」というと、「わからない」という。わからないのに行動だけが要求され、その補完としての授業もどきの「道德っぽい」授業をするのは恐ろしいことである。自分で自分を守るといえるのは聞こえがいい。だが本当に、「自分」を理解しているのだろうか。私には、空襲があっても逃げるな火を消せ、という戦中に近いものをその善意に感じると言ったら言い過ぎだろうか。

むずかしいことをわかりやすくの原則

質の良い科学をいかに分かりやすく伝えるか、これが授業作りの基本である。

今、子どもや教師たちに勧めているものがいくつかある。それは、マンガ、アニメである。これを使って授業をつくろうというものだ。この呼びかけに、何人かが呼応して実践が進められている。一つ目は、「はたらく細胞」（講談社）のシリーズである。

シリーズ累計発行部数は既に 450 万部。「体内細胞擬人化マンガ」『はたらく細胞』（清水茜、2020 年）。さらに、このマンガは、ウイルスの基礎的な知識が学べるものも出た。『はたらく細胞』のマンガに登場したインフルエンザウイルス、デングウイルス、ライノウイルス、ムンプスウイルスはもちろん、新型コロナウイルス(COVID-19)から、SARS、MERS、ポリオ、HIV、エボラなど、ヒトに感染し病気を引き起こすヒトウイルスを紹介する。ウイルスのしくみや構造、ウイルスと細菌の違い、ウイルスと戦う免疫細胞たちやワクチンのことなど、これでウイルスについての知識が深まる。ウイルスの基礎知識や新型コロナウイルスの正しい知識について、「ウイルス図鑑」では、世界中のヒトウイルスをカラーで紹介するのだ。この他にも別な作家たちもシリーズを書きつなぎ、アニメ映画にもなった。私も見に行った。シリーズはアニメ DVD を含めて全巻買いそろえた。あれほどよんでも頭に入らなかった「感染症」の難しい記述がすーっと入ってきた。



さらに、見える化する

『キャラでわかる！はじめての感染症図鑑』（日本図書センター、2020年）は、岡田晴恵教授監修。「新型コロナウイルス」の情報がのっている。「コロナが」とばかり叫んでいたのが、実は、「SARS」や「MERS（マーズ）」にすでに「コロナ」の言葉があったわけだ。

『Middle East respiratory syndrome』中東呼吸器症候群。MERS コロナウイルスによる感染症。感染すると重症の肺炎、下痢、腎臓障害などを引き起こす。〔2012年に中東へ渡航歴のある症例で初めて報告された〕→ コロナウイルス、と辞書にはある。

最初に、この「図鑑」を読んだ子どもたちのつぶやきは「コロナってほかにあるの？」というものだった。「コロナ」はその形であり、他にもあるのだというのがわかってくる。感染症への興味がどんどん広がる。「with 感染症」だと世間では言うが、高齢者には with どころではなく重症直結なのである。

「必要以上には恐れない」というが、「必要」よりは「恐れない」ということだけが印象として強調される。子どもを預ける先は高齢者だ。社会が「with 感染症」となるとはどういうことか、その視点を子どもに育てたい。

マスクをする、ソーシャルディスタンスを取って並ぶ、ということを徹底する。毎日、熱を測る。放課後はアルコールで校内の消毒。慣れてくると、原則が崩れて、マスクをしない、間を取らずに「密」になる姿も見た。この対応だけで防げるのが今次流行の「新型コロナ肺炎」感染症なら大したことはないとかをくくる。学校に子どもがいる風景は当たり前だ。この当たり前の風景をく持続する＝守る＞ことができるか。子どもの願いは生きることだ。自分や家族や友達がみな生きていること、これ以上の願いがあるだろうか。

5年生の教室は35人ほどであり、人数に対して狭い。給食時間には2つの学級は、それぞれが6年の教室へ半分が移動。6年生たちは、「特別教室」に移動し、大きな2つの教室に十分な広さをとって生活している。給食は、「給食指導」なので、この時間に移動してきた5年生の2つの教室を見る教師として、私は廊下で待機している。おかわりは教師がするために、担任は5品あれば自分の教室と、6年生の教室で食べる子どもたちのためによそう。5品×2＝10回、2つの教室でのおかわりになり、その役が私。そうもしないと担任が給食を食べる暇がない。食缶をもって教室を回る。つまり5回×2＝10回分。自分は子どもの給食よりも早く職員室で食べて行く。子どもたちはマスクを外して、前を向いて食べる。偏食の子の中には、マスクは外すが、ほとんど給食を食べずにしゃべる子もいる。3密を防ぐことは最低条件なら、飛沫感染が心配な瞬間は、教室が20人程度であつたら、どの感染症の危険性も減衰するかもしれない。学校でのルールはなぜあるのか、「子どもが自分も仲間も守る手立て」を学習し、それを後押しするのが学校だろう。

「新型コロナ肺炎」だけではなく人間が立ち向く向かう感染症は多い。一度に複数の感染症が流行するシーズンがある。「見えない敵」への恐怖は、「丸腰」での恐怖であり、全く「敵」と見なして撲滅せよ、滅亡させよ、という「戦いのイメージ」へ人を取り囲みはするが、それでは、決して「平和」や「共存」のイメージは創られない。仮想敵国の脅威を感じる精神を創ることになる。だが、体が細菌やウイルス「共存する」とはどのようなことかの理解、今生きていることが例えば、「億」を超える腸内細菌との共存であるということの理解がなければ、「歴史の中の感染症との戦い」だけでは一方でただ神経質に手洗いをし、閉じこもる子どもを育てるだけになるのではないか。

2. 保健室の行列 熱 マスク ソーシャルディスタンス



保健室のドアに貼ってあったアマビエの絵。せめてもの願いが伝わる。

「新型コロナウイルス」に慣れて行く子ども、育っていく子どもの姿がある。

子どもが慣れるとはどういうことか。学校のあちこちに矢印や足跡のマークが貼られている。対面通行ではなく一方通行、間を開けて待つことが徐々に習慣化していく。

保健室で、マスクを忘れた子、熱を測ってこない子が朝から並ぶ。もちろんこのほかにも体調を崩す子が列をなしているのである。熱が出たら原則、お迎えに来てもらう、兄弟姉妹も中学校とも連携をとって帰すのである。

養護教諭の今までの業務に加算されていくのだ。そして放課後のアルコール消毒の作業が待ち受けている。これとて、次亜塩素酸水、次亜塩素酸ナトリウムところどころ変わった。

アマビエで学ぶ授業

ここに登場する「アマビエ」は水木しげるも描いている妖怪である。



出典：『肥後国海上の怪（アマビエの図）』京都大学附属図書館所蔵（京都大学貴重資料デジタルアーカイブ）

- ① 次の絵は何でしょうか？
- ② いつのころのものでしょうか？
- ③ どのものですか？

江戸時代の終わりごろ、今から 180 年ほど前、このかわらばん（新聞の号外のような刷り物）に、絵と文とがのっている。場所は、肥後国、つまり、今の（ ）県で、夜になると海に光る物が出たために土地の役人が行くと、（ ）と名乗るものがあらわれた。役人に、「これから 6 年の間は諸国で豊作がつづく。しかし同時に疫病（感染症）が流行する。私の姿を描き写した絵を人々に早々に見せよ。」と予言のようなことをいって、海の中へと帰って行ったとされる。

つまりこの絵は何でしょう？

「伝染病」「疫病」「感染症」はことばとしてはほぼ同じであることを伝える。子どもたちは流行する病気があることを知っている。一度かかったらかかりづらいということも、自分のワクチンの接種の経験と共に知っている。そこには「アマビエ」などは存在しない。古いはずの「魔除けの妖怪」に頼らなければその対応も見えず、心も折れそうになるのは、家族に医師や看護師、保育者、学童保育、介護職員を抱えている家庭には深刻な問題なのだ。21 世紀も「祈る」ことが起きている。今までいなかったアマビエが迷信としても心に入ってしまう。見えないものを「可視化」する。言葉で表す 現代のアマビエとは何かを考える。

アマビエが「形」になるのなら、現代人も感染症を形にしよう。それは、日常では見えないはずの新型コロナウイルスであるが、実は写真をみな見ておりその形から「コロナ」と名付けているのだ。「コロナ」をさらに子どもなりに「可視化」する。

- ① 可視化し
- ② 特徴を共有し
- ③ 「カード化」する

キャラクター化である。1 つでできれば他の感染症も同様にできるだろう。参考にするのは『感染症キャラクター図鑑』（岡田晴恵監修、日本図書センター、2016 年）である。ここでは「新型肺炎」の説明が載っているが、その姿はまだキャラクター化されてはいなかった。他のウイルスなどのキャラクターを見ながらカード化する。この他の種類の「感染症カード」がたまれば、「感染症カード」ゲームが可能だ。



3. 子どもたちに経験を記録化させていくこと

COVID-19（新型コロナウイルス）の「経験」を書かせることは大事だ。日々の変わらぬ「出来事」を書かせ続けることともに、それらを「共有」し、「共通の」感染症への理解をすることではじめて次の備えがある。だが、ここには、「共有」してもオープンにできない経験もある。医療関係者の子どもだったり、自分や家族が「新型コロナウイルス」にかかった場合もあるだろう。常にオープンにして経験を共有化するのはできない。教室の中だけで、しかも、匿名化し、配布せずに読み上げるだけでもいい。

これは、ノートではなく、全学年「絵日記」用紙に書かせて、出すだけでもよい。これを事ある度にする。そして、「絵と文からそこで一句」を作るのである。このことが「新型コロナウイルスカルタ」として蓄積できるだろう。（佐藤広也『子どもたちはワハハの俳句探偵団』労働旬報社、1997年）

4. 「はたらく細胞」を見ながら考える自分の体のこと

2021年には新シリーズがテレビで始まる「はたらく細胞」を授業で使うという提起である。インターネット上では、教育・医療関係者がダウンロードして使えるように32のキャラクターが配信されている。さらには、キャラクターを使って図鑑や一般向けの医療テキストが発売された。

映画は「乳酸菌とがん細胞」に関わる話だ。体内の細胞で日々繰り返されているのだと伝えるために、体内の細胞をキャラクター化している。

再登校が始まり、ソーシャルディスタンス確保のために給食場所を分散した5年生の給食指導に付くが、給食時間のほんの少しの間、アニメを視聴。出てくるのは「細胞」だけではなく「白血球」「赤血球」「血小板」「マクロファージ」「T型リンパ細胞」など普段の会話からは決して出てこないし、覚えることもない言葉ばかり。子どもたちは体内で日々起きていることなのだと知ると微妙に変化が現れる。「もっと見たい」、というようになっていった。校内では「コロナが・・・」「PCR検査が・・・」「手洗い」「ソーシャルディスタンス」、臨時休業、分散登校、3密という用語に囲まれて、コンビニのレジのように下がったビニールの職員室を見たことだけでも、子どもは「わけのわからない不安」と戦わなければならない。「戦う相手」もよくわからず、立ち向かう自分の体のこともわからず、見えない敵と戦えと要求されていく。委員会活動でポスターを作っても「コロナと戦おう、負けるな!」というものが多いいのは仕方がない。「はたらく細胞」での免疫の働き、赤血球・血小板の「戦い」が出てくるたびに、初めは啞然として見ていたが、回を重ねるとキャラクター化された血液や細胞の活躍がわかり、「赤血球が危ない!」「血小板がかわいい」「白血球はいつも戦う」ことをしゃべっている姿があった。私も多くの大人向けの「感染症」の本を読むのだが、この「はたらく細胞」に出てくる言葉と重なり、説明が多くしっかりその名前を覚えることはできないものが多い。ちなみに養護教諭はこのコミック全巻を読んでいて、事務官もネットでアニメを見ていた。「はたらく細胞」を、今、授業として取り扱う意義は大きい。理科なのか学級活動、学級指導でなのか、あるいは「総合」なのかも問われるだろうが、結論はどれでもよい。できるなら「総合」の内容として「はたらく細胞」を学べたらと思う。

5. 新型コロナ肺炎 COVID-19 をキャラクターにしてみる

キャラクター化というと軽い感じがするが、軽くてよい。ネット上で流れる「コロナ」と呼ぶものは、ものなのか、生き物なのか・・・子どもたちの友達への質問でよくいうのは「好きな食べ物はなんですか?」だろう。『感染症キャラクター図鑑』は2016年に出ているのでその時点で、COVID-19は登場していない。だからこそ、この「コロナ禍」で創り出す意義は大きい。この本を子どもたちに紹介し、次のようなワークシートを用意する。ここからキャラ化しカードする。むずかしい情報もどんどん入れることは可能である。

これは、新型コロナウイルスを引き起こすコービッドナインティーン、みんなが「コロナ」と読んでしまうウイルスの写真です。

①これを見て、大きさを考えましょう。

1 mmより (大きい、小さい)

マスクの目 (め) よりも (大きい、小さい)

②このウイルスは普段どこにいますか。

③写真を見て、絵を書きましょう。キャラクターにして名前もつけてみましょう。

*ひとつひとつのとくちょうをよく見て下さい。

*よびかた

*大きさ

*とくいわざ

*すきな場所、すきなもの

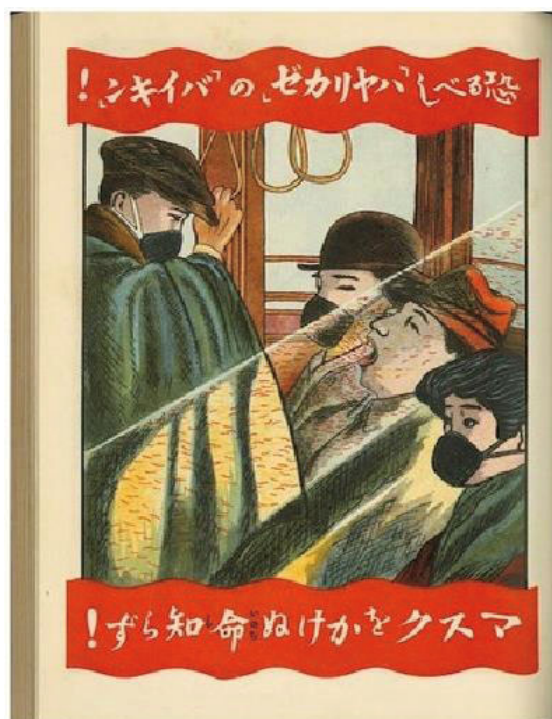
*にがてなもの、すぐにやられる薬など

*生きているの

*なかまはだあれ (これらをカードに書き込めるようにする)

6. 今も昔も「マスク」で感染症を防ぐ そして、「密」を防ぐ

「スペイン風邪」の大流行の記録として東洋文庫からでている内務省衛生局編『流行性感冒』（平凡社、2008年）が授業作りに使える。



防 予 感 流			
(局生衛省務内)			
一、 近寄るな	二、 鼻口を覆へ	三、 予防注射を	四、 含嗽せよ
咳する人に	他の為にも	転ばぬ先に	朝な夕なに

①次のポスターは、いつごろのものでしょうか？

②何を書いてあるのでしょうか？右から左に読みます。

今から100年前に世界中で大流行した感染症に「スペインかぜ」があります。

実は「インフルエンザ」だったのです。

このポスターでは「黒マスク」をしていますね。

さて、これではまだ対策が不十分なところはありませんか？この状態はまだ、漢字で書くと「
」なのです。

今も100年前も、インフルエンザを含めて、マスクが大事なものは、うつらない、うつさない、ということがかなり手軽に行えるからですね。100年経ってもマスクが有効なのはほかにも理由があるのでしょうか？考えてみましょう。

ここでは、黒マスクで取りあえず「飛沫感染」を防ぐのである。しかし、この電車の光景はどうだろうか。ぎゅうぎゅう詰め「密」ではないか。であればこそ、この「密」の回避はどうしたらいいだろうか、という課題ができる。この本には、北海道での死者数や対策も詳細に述べられているので授業づくりのヒントが満載である。

100年前の、この「流行性感冒」の本にはいくら読んでも出てこないことがある。それは・・・

7. 「スペイン風邪」の授業化へ向けて

それは、「スペイン風邪」はスペインが発生した場所ではないということと、これが戦争によって世界に広がったことと、軍隊の中での死者の有様がないことである。大阪住吉村では大正8年(1919年)に「村葬」が行われている。写真にあるような資料を私はもっているのもこれで授業づくりをしようとしている。戦艦矢矧(やはぎ)は、旧日本海軍初期の軽巡洋艦である。1918(大正7)年秋にシンガポールに寄港した後、艦内で「スペイン風邪」の集団感染が起きた。乗員の1割を超える48人が死亡した。呉市上長迫町長迫公園(旧呉海軍墓地)には「殉職者」の慰霊碑がある。まず、第一次世界大戦に日本は参加したのか。48人もの死者がでた経緯などが戦争と感染症の授業の教材になるだろう。手元にある村葬葬儀順序には、開くと「会葬案内書案」には「大戦」とあり、流行性感冒に襲われ「麻尼拉」の「土と化したる」とある。「大正7年12月3日」に「罹病」し、12月10日にマニラのセントポール病院で死亡とある。1914(大正3)年7月に第1次世界大戦が始まると日本は、同盟を結んでいたイギリスを助けるために、8月23日、ドイツに対して宣戦布告。日本海軍は、ドイツが中国および南太平洋に持っていた「租借地」や「植民地」を占領するために艦隊を派遣することを計画、「矢矧」も投入される。ドイツの拠点の占領すると、今度はイギリスから、ヨーロッパやインドとオーストラリアを結ぶ商船航路をドイツ海軍の攻撃から守ってほしいという要請があり、インド洋に対して艦艇を派遣することになる。だから、村葬の文には「太平印度両洋」とあるようにインド洋や南シナ海で任務に就いた。他の艦任務を交代するために1918(大正7)年11月9日、シンガポールへ入港。「矢矧」は乗組員を上陸させたことで、「スペイン風邪」集団感染を引き起こすことになった。11月30日にシンガポールを出港しフィリピンへの航路の途上、艦内で「スペイン風邪」の「クラスター」が発生し、看護兵(衛生兵)や軍医まで倒れた。矢矧には469名が乗っており、306名が発症し、48名が死亡。発症率は約65%、致死率は約16%。当時、日本国内におけるでは発症率は約43%、致死率は約1.6%との記録がある。矢矧では致死率は10倍であった。もちろん後半の分析は、これらの1次資料にはないが、日本の伝染病の歴史を授業化していく必要性を痛感して、進めている。



(著者所蔵)



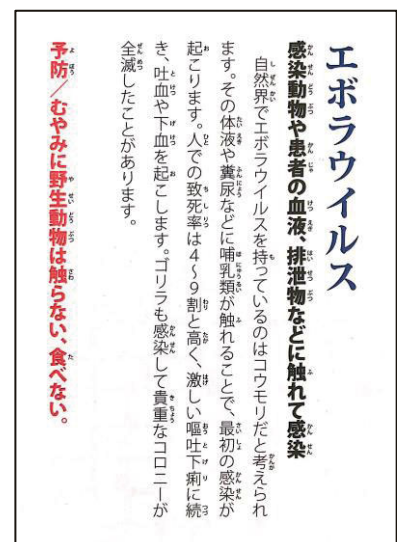
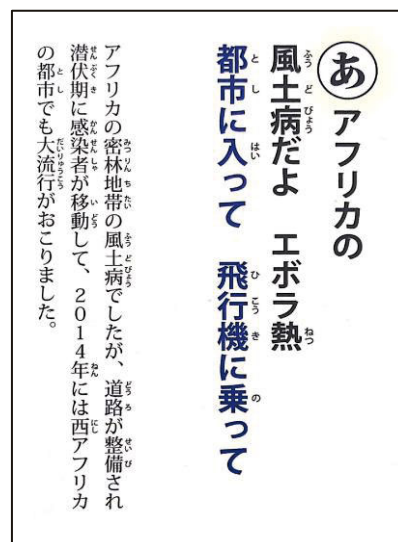
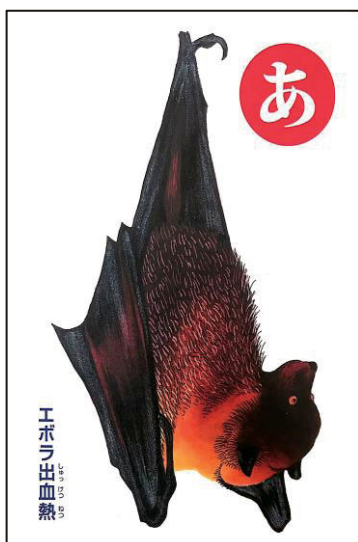
(著者所蔵)

8. 「感染症カルタ」を「読む」



参考にした『感染症カルタ』（奥野かるた店）は岡田晴恵教授監修のもの。既に、この新型コロナ肺炎前から出されていた。このコウモリの絵は何だろう。そしてキツネの絵は何だろうか。「あ」の札が「エボラ出血熱」で「コウモリ」の絵。裏側には、「自然界でエボラウイルスを持っているのはコウモリだと考えます。その体液や糞尿などに哺乳類が触れることで、最初の感染が起こります。人での致死率は4～9割と高く、激しい嘔吐下痢に続き、吐血や下血を起こします。ゴリラも感染して貴重なコロニーが全滅したことがあります。」とある。「予防 むやみに野生動物には触らない、食べない。」とあるのだった。では「あ」の読み札は何か。「あ アフリカの風土病だよ エボラ熱 都市に入って 飛行機に乗って」というものだった。

「ゴリラも感染」の言葉がある。「エボラ熱」とこのたびの「新型コ



「コロナ肺炎」を引き起こすウイルスのレベルはほぼ同じ。しかも「コウモリを食べたことが原因」などという報道もあった。その対応は「野生動物は触らない、食べない」である。日本の動物園のほとんどの生物は動物園生まれ動物園育ちなのであるが、動物園の「子ども動物園」の閉鎖や手洗いの徹底を呼びかけるポスターの意味も考えることができる。「き」のカルタは見た目には「かわいい」というだろう。だが、北海道でもおなじみのこのキタキツネである。「旭山動物園のゴリラのゴン太」がキツネを媒介とする「エキノコックス」で死亡したことが書かれているのである。



じっとカルタを見ていた子どもが言う。「先生、ゴリラに伝染するってどういうこと？」と。つまり、ゴリラが本来いるアフリカとキタキツネは出会うのかということらしい。「自然界では主にキツネと野ねずみに寄生する」とあるが、この場合の「自然界」とは何か。動物園ではどうなのか。本来なら出会うはずのないゴリラがエキノコックスに犯されていくという現実がにわかに信じられないという。「46も感染症ってあるの？」と初めは言っていた子どもたちも、それはとりあえず人間が感染する数で、ということが徐々に実感されていく。

更にカルタを眺めていると感染元さえわかれば対策はとれるらしいこともわかる。全てのエキノコックス寄生虫を撲滅することは容易ではないこともわかってくる。カルタ大会を開いて読み上げていけば内容が定着する、として、医療関係や学校で進めて行こうとある。今、接触を伴い、密となるカルタはそのままでは推奨はできないが、掲示はできる。

9. 「感染症カルタ」を創る

これから二枚のカルタを見せます。このカルタに共通するものは何でしょうか？

「へ」の札は「奈良の大仏」で、そこには「天然痘」とある。「ほ」の札は「アンネフランク」のようで、そこには「発疹チフス」とある。

奈良の大仏と感染症（天然痘という説が強い）による、藤原4兄弟の死亡と、病氣平癒を大仏の力と願う聖武天皇の姿が浮き彫りになる。アンネフランクが描かれ、戦争と強制収容所でのチフス流行は、本来は病氣にならずも済む者を病氣に追い込むという異常さを教えることに直結する。

どうやってうつるの？どんな病気になるの？

どう予防するの？過去にどんな流行を起こしたの？

このように解説書には書かれている。このことはとりもなおさず生きる要求に直結する。これに答え

る、答えようとして学ぶことが何より学校では求められるだろう。

子どもたちに一枚ずつ渡す。そのカルタを A4 サイズの画用紙にそのまま写させる。取り札もセットである。こうすることで「自分の担当カルタ＝自分の担当感染症カルタ」となる。歴史上たくさんの感染症があるが、それらは「今」に続くことに気づくのだ。

10. 47 番目のカルタ作り あるいは 47 番目だけのカルタづくりを

47 番目のカルタづくりをしよう

「感染症カルタを」見ながら、47 枚目のカルタの札をつくってみましょう。

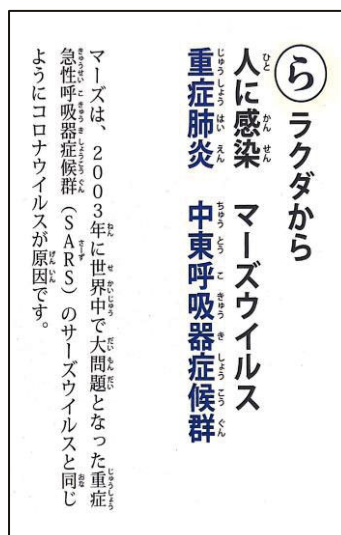
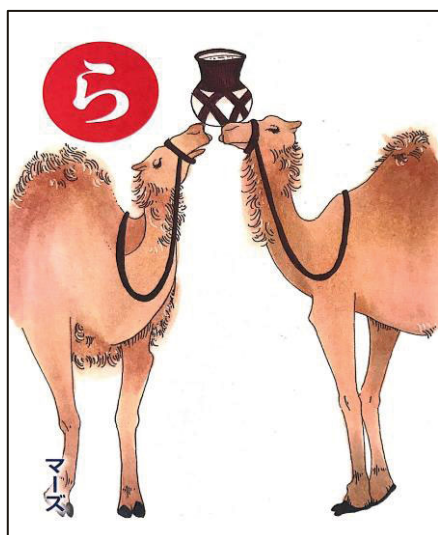
「感染症カルタ」は 46 枚しかカードがない。これが逆に子どもたちのファイトをくすぐる。掲示したカルタを見ていた子が「発見」した。

「先生、コロナがあるけど、へんなところにあるよ。このカルタ。」

「そうだね、コロナがはやるまえに発売されたものだからね。へんなところって？」

「らくだのところにもマーズってあってさ、その解説の所にコロナってあるんだよ。」

「よく気づいたね。」



ここには確かに「コロナ」と書いている。でも今問題となっている感染症を引き起こすのは、何か？どんな名前がついているか？その感染症の名前はなんというのか？と考える。「中国」でもないし、ラクダの話題でもない「新型」。SARS と MERS と略称される感染症。発売された時にはこのカルタには「新型」はなかった。

これらを踏まえて 47 枚目を絵と言葉で語り、情報として載せる。47 枚目は「新型コロナウイルス」である。ここでただ「コロナ」と呼べないだろう。知っている限りの知識を書き、予防への 575 なり、57577 を書く。全部がこの 47 枚目だけのカルタ大会でもよい。手近のタブレットで検索すると、「SARS-CoV-2 による感染症を COVID-19 と呼ぶ。感染症法では、新型コロナウイルス感染症と呼ぶ」とある。「サーズウイルスなのか！」という驚きが子どもにもあがった。

終わりに 楽しく楽しく生き生きと学ぶための体をくぐった体の授業を

「遠隔講義」の中の共同の授業の可能性を探る

さて、私は大学でのいくつかの講義を 20 世紀から兼職で受け持っている。この 2020 年春からの講義は何と 1 年中、「遠隔講義」となってしまった。学生は横のつながりを全くもてないままこの遠隔の講義を受け、私は前期の全てを、メールでのやりとりだけで済ませてきた。膨大な数のメールが残った。後期は同様だが、3 つの講義で、のべ 240 人にもなるので対面は不可能。学生とは対面ではなく課題とメールの往復書簡のみであった。ある時、「ダンゴムシを探せ」という課題を出した。メールで返ってきたのは、「うちの前にいました」というものが結構多かった。今年度から使用する「生活科」の教科書に生き物を扱う単元で載っている「虫」。この回答は間違っていないが、大変に困った回答であった。ダンゴムシは扱いやすくどこにでもいるから載せられたのだろう。だが、このダンゴムシだが、我々の年代の子どもの時代にはいたのだろうか、というもみな、ダンゴムシで遊んだ経験がない、というものだった。どういうことなのか。ダンゴムシは実は外来種である。そして森よりも都会にいるものである。だから、「家の前」は都会なのである。その「家」はどこかと問うと、札幌とか釧路とか、愛知といった各地域からのアクセスであったことがわかった。ワラジムシもダンゴムシも、昆虫ではなく、陸の甲殻類である。では水の甲殻類といえば、アメリカザリガニなのであった。やはり、森に囲まれた自然豊かな地にはいないようであった。釧路であっても開けた街にはいた。しばらくは遠隔でダンゴムシ探しははやった。学生たちは、生物にも、人にも直接の関わりがすくないままで教職の単位を修得できてしまう。だがせめてもメールでやりとりすることは私にとっても学生にとっても少しは楽しく、気の紛れるような課題であった。きちんと人や物や事物につながることを、共有することが大切だという趣旨の感想をいくつも受け取った。

後期、私はやはり大勢を抱えつつ、まだできると思いながら、学生に「だいじょうぶですか」とメールを打ち続けている。そういう側の教師たちがまたズーム疲れ、ネット疲れとなってきていることを感じている。やらなきゃいいんだよ、あるは、もっと工夫せよ、というのもわかる。だが教師として学生の前に立つとそうも言うてられない。これは悪循環でありどこかでルールを決めて納得していかないと遠隔講義を授業する方の教員がはるかに疲れてしまうだろう。

本当に少人数でのフィードバックも併用してみた。これは講義とは関係ないが、気晴らしに現場へ行くということでもあり、10 人程度の学生がやってくる。植物園や被爆者会館、彫刻美術館、札幌村郷土記念館などで学ぶ。そうしながら、ソーシャルディスタンスや三密と子どもについて考える事もできるのである。学ぶ視点を出すこともなく、考えてみましょう、というのは体にも頭にも、心にも何も残らないだろう。これまで述べてきた授業プランは、大学生にも取り組んでもらおうと考えている。

壁面でせめて訴えてみることも 今、あなたの生きている細胞は、はたらいているのだ

小学校の廊下掲示板に先の全カルタを貼ってある。そして「はたらく細胞 ウイルスの教科書」も。赤ペンを入れながら、情報の追加と、「どことどこがつながるのか」書き込む。この COVID-19 はいつまでも続く。with ということが形を変えてより過ごしやすいスタンダードが生まれるにちがいない。暗澹たる気持ちにするのではなく今も生きていることに希望を見いだすことは、祈るだけではだめだということなのだ。子どもができる、学校ができる感染症の教育はただ一つの COVID-19 だけのことではない。どこから何かの感染症が来ても、すでにそれに打ち勝ちながら生きているものもあり、それは自分自身の「はたらく細胞」で起きていることなのだとすることを踏まえたい。希望は体の内にあるの

だ。



＊さとうひろや 1958 年生まれ 長らく小学校教員、現在は担任外。その傍ら北海道教育大学や北海道大学、保育専門学校などで、生活科、社会科、国語科、総合的学習などに関する科目を担当する。憲法、彫刻、ザリガニ、図書館、どんぐり、青銅鏡までを守備範囲とする。北海道学校図書館協会、ザリガニと身近な水辺を守る会、北海道アニメーション研究会代表、歴史教育者協議会。

(付記)

本稿は 2020 年 10 月末時点での執筆によるものであり、月だけ記され年が特記していない場合はすべて 2020 年である。また、出典の示されていない学校内の写真は、すべて著者の勤務校にて撮影したものである。